THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

Rotary 公益財団法人 米山梅吉記念館

米山梅吉記念館

館報

春号

2026 Vol.47

旧米山記念館と長屋門から富士山をのぞむ（1998年ころ撮影）

いさかいもなき漫々の春田かな

米山梅吉没後80年を偲んで

記念館を訪問する多くの人が、静岡・長泉にある米山梅吉の墓参をする。この墓碑に刻まれている俳句は、梅吉49歳の時の作である。

昔は田へ水を引き入れる水路が十分に整備されておらず、日照りが続くと水不足になり、田植えの準備もままならなかった。そのため自分の田畑に水を取り込もうと農家の人が争った。これを水争いといい、いさかいはこの水争いのことである。梅吉の養父藤三郎は、長泉村の村長として箱根用水の水利権の裁判に立っている。

長泉の米山墓碑

そんな苦難の時代もあったが、梅吉の代になって水争いは少なくなった。「今年は十分な水があり水争いもなく漫々と水をたたえることができ、田植えが順調にできる、喜ばしいことだ」と田植え前ののどかな田園風景が詠まれている。

1946（昭和21）年4月28日、米山は長泉の別邸で78歳の生涯を閉じた。明治・大正・昭和の時代を生きた78年は、激動の日本の歴史に重なる。

今でも世界では様々ないさかいが絶えない。2026年は、米山没後80年。あらためてその精神にふれるよい機会である。

秋季例祭

報　告

■ 日　時／2025年9月20日（土）午後2時
■ 会　場／米山梅吉記念館ホール

池田修 長泉町長

松村友吉 理事長

講　演

第2620地区 直前ガバナー 小泉久司様

東京RC副会長 馬城文雄様

懇　親　会

【演題】米山梅吉と青山学院

【講師】薦田 博 氏（学校法人青山学院　常務理事）
杉浦 勢之 氏（青山学院大学　名誉教授）

青山学院の歴史

青山学院は明治の初め、1873（明治6）年に政府がキリスト教禁制の高札を撤廃したことにより、翌1874（明治7）年にアメリカのメソジスト監督教会から派遣された弱冠23歳の女性宣教師、ドーラ・E・スクーンメーカーの設立した僅か生徒数7名の女子小学校とその4年後の1878年開校した耕教学舎、その翌年1879年開校の美會神学校の3校が後に青山の地で一つになり青山学院となりました。耕教学舎が後に改称され変遷の後東京英和学校となり、米山梅吉は英語が重要であると入学して学んだことにより青山学院の校友となりました。

薦田博 常務理事

1874年11月16日に開設された女子小学校が青山学院の創立記念日となっており、一昨年2024年に150周年を迎えました。

現在の青山学院は幼稚園・初等部・中等部・高等部・大学・大学院の一貫教育を行う総合学園として2万人を超える園児・児童・生徒・学生を要するまでに発展しました。

青山学院緑岡小学校と緑岡幼稚園

1933（昭和8）年4月に青山学院院長に阿部義宗が就任し院長就任演説のなかで「青山学院の指導精神たるキリスト教主義教育の徹底のためとして、下に深く根底をおく初等教育の方が急務であり、真の教育は根底から始めるのが大切であります。されば学院の急務は、幼稚園を設け、小学校を建て、幼児に基督教々育を徹底させるにありませう。斯くしてこそ青山学院の主義や精神を骨髄とせる人物が、始めて現れる」と述べています。

阿部院長の教育理念に共鳴した校友の米山梅吉による建設費及び数年間の経営費の寄附によりその計画は実現しました。青山学院小学財団を設置し、1937（昭和12）年に青山学院の敷地内に青山学院緑岡小学校が設立されました。米山は自ら小学財団の理事長、校長に就任し、初等教育の充実に向けて尽力しました。

米山校長が掲げる教育の理想とは「第一に青山学院の持つ宗教教育、第二に英語を教え、平和を愛する国際的人物を作ること」でありました。そして、「学校経営方針」のなかに「人々にしてほしいと、あなたが望むことを人々にもその通りにせよ」という聖句が謳われ、これが校訓となりました。この米山校長が掲げた「教育の

理想」と「人々にしてほしいと、あなたが望むことを人々にもその通りにせよ」という精神は現在の青山学院に脈々と受け継がれています。

青山学院緑岡小学校最初の入学式で式辞を述べる米山梅吉校長

同じ年、米山梅吉の妻春子の財政支援により、青山学院緑岡幼稚園が開園しました。春子は園長に就任し、保育事業に力を注ぎました。幼児期の保育に力を尽くさなければ「真の人間教育は完成されない」との信念でありました。

「青山学院緑岡幼稚園のさだめ」には、第一条で『心身の健全なる発達と善良なる性情の涵養とに重点を置きます』第二条で『保育五項目はいづれも個性を尊重しつつ其特性発揮（はつき）に努めます』とあります。ここに見られる通り、青山学院が長年重視する個性の尊重が謳われています。緑岡幼稚園の開園により1899（明治32）年に青山女学院附属幼稚園が閉鎖されて以来、途絶えていた保育事業が再び始まりました。

1944年4月19日東京都は「緊迫セル現下の情勢に鑑み幼稚園は当分の間其の保育事業を休止セラルル様」通牒しました。緑岡幼稚園も4月限りで休園となり約7年間をもって幕を下ろし園舎も空襲により全焼しました。青山学院の幼稚園が復活するのは、17年後の1961年の青山学院幼稚園の開園を待つこととなります。

青山学院初等部の設置

1946（昭和21）年～1959（昭和34）年

青山学院緑岡小学校は、1941（昭和16）年の国民学校令施行に伴い青山学院緑岡初等学校と改称し、疎開先の青森県中津軽郡船沢村で敗戦を迎えました。疎開から戻った緑岡初等学校は校舎を焼失していたため、高等女学部校舎の4教室を借りて1945（昭和20）年11月15日に授業を再開しました。この頃、病魔に侵されていた米山でありましたが、緑岡初等学校を存続させるため、その経営を青山学院小学財団から財団法人青山学院に引き継がせるところまでを見届けました。

青山学院は米山の志を受け継ぎ、1946（昭和21）年4月1日、青山学院初等部を開校しました。1947（昭和22）年度には国民学校令に代わって学校教育法の定める小学校となりました。ようやく1949（昭和24）年度に初等学校跡地に建てられた木造2階建ての校舎で授業が行われるようになりました。

1952（昭和27）年には内部を焼失した講堂を改修、米山記念講堂と命名し、全学年礼拝が可能となりました。聖書の授業や英語の授業も実施され、青山学院のキリスト教主義教育の根底を形作りました。

青山学院幼稚園の設置

青山学院緑岡幼稚園は、戦局の悪化に伴い1944（昭和19）年に休園となり、1945（昭和20）年5月25日の空襲によって園舎を焼失しました。戦後も幼稚園は休園となったままでしたが、1950（昭和25）年には豊田実院長の提案を受けて、幼稚園の再開が理事会で承認されました。しかし、その後も他の設置学校の復興が優先されたため、幼稚園の再開は翌年断念されました。

幼稚園から大学院に至る一貫教育を実現するため、1961（昭和36）年4月1日に青山学院幼稚園を設置しましたが、園舎が完成していなかったため、大学地下食堂のロビーを仮保育室にあてていました。

幼稚園は1962（昭和37）年1月に床暖房等を備えた最新設備の新園舎が完成し移りました。草花や樹木が緑豊かに植えられた園庭で、園児たちは自然の恵みのなかでよく遊びました。幼稚園では多彩な行事が行われており、毎朝の礼拝やイースター礼拝、母の日礼拝、収穫感謝礼拝、クリスマス礼拝といった各種礼拝、日々の遊び・生活を通じて、キリスト教主義の保育が実践されております。

青山学院東門と幼稚園玄関

祖父岡崎忠雄とロータリー

東京ロータリークラブ
2012-2013 年度会長　**岡崎 由雄**

神戸ロータリークラブは、1924（大正13）年8月13日に創立が決定されました。この日オリエンタルホテルに召集されたのは、安部正也、久保正助、南郷三郎、松方幸次郎、津田弘視、金子直吉、平塚広義、大塚伸次郎、福田立五、岡崎忠雄、笠原正吉、大谷吟右衛門、勝山勝司、勝田銀次郎、島田義治、小曽根貞松、鈴木岩藏。

私の祖父・岡崎忠雄（明治17年生まれ）は、神戸ロータリークラブの創立メンバーです。岡崎財閥創業者岡崎藤吉の婿養子となった忠雄は、慶応義塾大学卒業後、養父・岡崎藤吉が設立した岡崎汽船で海運業に従事します。1913（大正2）年7月、神戸財界の有力者によって内外ゴムが創業された際には、出資者の一人として名を連ねました。また、1917（大正6）年5月、養父が神戸岡崎銀行を設立した際は、常務に就任するなど、若い頃から後継者として育てられました。

1927（昭和2）年に養父が亡くなった後は、岡崎汽船をはじめ、神戸海上運送火災保険や神戸岡崎銀行などの岡崎家直系企業の社長や頭取を務め、1931（昭和6）年にそれらの会社の持株会社である、合資会社岡崎総本店を設立して社長に就任し、財閥の形態を取るに至ります。1936（昭和11）年12月に神戸岡崎銀行を中心にして、兵庫県内の7行が合併して神戸銀行が誕生した際には、会長に就任しました。1931年1月には、神戸商工会議所会頭に就任しました。

戦後は、財閥解体を経て、岡崎汽船（岡崎本店汽船部）の業務を引き継いだ日豊海運会長や、その他岡崎家系列の企業の役員、公職としては経団連顧問、日経連顧問などを歴任しました。

伯父・岡崎忠によると祖父・忠雄は、正義感が溢れ過ぎているといった人で、特に時間に関して厳しい人でした。家庭でも厳格であった反面、細かいところに気がつき、孫たちには非常にやさしく接してくれました。一方で趣味も多く、ゴルフやテニス、コーラスや長唄、鉄砲を担いで猟に出るなど多才な人であったようです。

岡崎忠雄氏

1920年東京ロータリークラブ創立後、日本では大阪、神戸、名古屋、京都、とロータリークラブができました。1927年には京城、1929年に大連、奉天、ハルピン、1931年には台北にも広がりました。当時はアメリカのクラブの模倣の時代で米山梅吉、平生釟三郎、井坂孝氏らに頼った運営がなされていました。

こうした中で、各クラブを横につなぐ全日本ロータリークラブ連合会ができ、第一回の大会が東京で開催されます。

その後、大阪、東京、名古屋と開催され、名古屋の大会で日本のロータリークラブは本部直属を離れて1つのディストリクトを設けたいという決議がなされ、シカゴの本部に承認を求めます。

その意気込みをみせるために1928年10月、第二回ロータリー太平洋会議を東京で開催することになりました。この大会は国際ロータリーにとっても初めての地域開催の大会で、264ものクラブが招待され、海外からの出席は9ヶ国109名を数え、国際ロータリー会長のトム・サットン夫妻も二人の令嬢を伴って参加しました。

太平洋大会出席のため来日したサットン夫妻と令嬢

10月1日から4日間開催された大会は、本会議の他に午餐会、晩餐会、仮装舞踏会や観劇、首相官邸でのお茶会や園遊会もありました。またこの大会は、今のロータリーでは普通に行われていることですが、プログラムが細かく計画され、時間厳守で進行。歌が斉唱され、会員出席率の競走をするなど、堅苦しいほど整ったものでした。

大阪ロータリークラブができた時、珍しいクラブができたと話題になりました。このようなクラブを神戸にも、という声があがりましたがなかなか進まなかったため、松方幸次郎によってチャーターメンバーが集められ、大阪RCの星野行則、福島喜三次からロータリーの精神綱領や組織運営などの説明を受け、クラブ設立の準備が進んでいきました。

こうして松方幸次郎を初代会長に神戸ロータリークラブが創立されました。忠雄は第5代会長を務めます。

また、1930（昭和5）年3月、シドニーで開催の国際ロータリー太平洋地域大会には日本代表として出席しました。

神戸RC 右から3人目 忠雄氏

1939年7月、第70区は、名古屋以東の東日本の第70区、西日本および台湾の第71区、朝鮮・満州の3地区の72区に分割されました。

第11年次の第70区大会で忠雄は第71区のガバナーエレクトに推挙されましたが、就任後まもなく日満ロータリーが解散となったので、残念ながらガバナーとしての職務はほとんど果たせなかったのでした。父・岡崎真一もこの年に神戸ロータリークラブに入会しました。1940年第二次世界大戦が始まり、敵国米国の組織であることから軍部の圧力が加わり、日本のロータリークラブは止むなく国際ロータリーから脱退します。

1940年9月5日、神戸ロータリークラブも国際ロータリーを脱退して、神戸木曜会と名をあらためました。会

長は小泉良助氏がそのまま木曜会初代会長に就き、一回もぬけることなく例会が続けられました。

1945年3月17日、西神戸の大空襲により、会員の直木太一郎、河村一馬、そして祖父が罹災します。

会場のオリエンタルホテルも、エレベーターが停止したもののホテルは残っていたので、例会は継続されました。その後の被弾により会員の中にも負傷者が出て、疎開のために退会をするものも出てきました。しかし、そんな状況下でも例会は継続され、オリエンタルホテル焼失後は、生田区明石町の同和火災の重役室で続けられました。

創立から昭和20年6月消失まで例会場のオリエンタルホテル

私は、神戸木曜会発足の1940年に生れました。私が子どもの頃は、現代のように子供が楽しめる娯楽施設は焼け残った神戸王子動物園くらいしかなく、祖父が毎週木曜日に例会場の神戸オリエンタルホテルに行く自家用車に乗せてもらうことが楽しみでした。

木曜会の家族会には、私も連れていってもらいました。家族会の前日から「明日の夜は木曜会だね」と言って夢見るほどでした。

その木曜会がロータリーの例会であると知ったのは、小学生になってからのことです。祖父から「ロータリーは地域社会に役立ち、困っている人たちに手を差し伸べる、親しい大人の友達が毎週昼食に集まる会だよ」と教えられたのもその頃のことです。

このころから国際ロータリーへの復帰も近いという東京からの情報もあり、会の陣容や職業分類を整え準備をはじめました。

昭和23年9月2日、国際ロータリー本部のG・ミーンズ氏が、東京のロータリー復帰協議会長の小松隆と神戸木曜会を訪ねてきました。ミーンズ氏は、インドから東洋諸国を経て帰国する途中で日本に立ち寄り、主要都市における元ロータリークラブの現況を視察していたのです。そして帰国したら日本のロータリークラブの国際ロータリーへの復帰について努力する、と約束してくれました。ただし、ロータリーという名称と歯車のマーク使用については慎重な注意を払ってほしいということでした。残念ながら、その年の国際ロータリー復帰はかないませんでした。

しかし、翌年3月24日、ミーンズ氏が東京の手島知健と共に神戸にやってきました。ミーンズ氏は数日前なんの予告もなしに東京のロータリー復帰協議会に現われ、国際ロータリー復帰可能の朗報を手島に伝え、東京の水曜クラブと協議し、その足で神戸に来たのでした。

こうして神戸木曜会は発展的解消し、4月13日付で神戸ロータリークラブが国際本部に承認されました。

岡崎三兄弟 左から真雄、藤雄、由雄

時が流れて、私の長兄・真雄（東京銀座RCパスト会長・同和火災社長）、次兄・藤雄（神戸RCパスト会長・内外ゴム社長）が次々とRCに入会しました。私は、1974（昭和49）年東京RCに入会しました。

祖父、父、そして私たち兄弟三代続いてロータリアンになったのも、何かのご縁でしょう。同年、日本は21地区になりました。祖父がガバナーを務めてから35年。隔世の感があります。

「新しき村」公演について

三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会　会長　長澤　聖浩

私の暮らす岩手県紫波町彦部地区は、県土のほぼ中央に位置し、東北一の大河「北上川」と北上高地の山々に挟まれた細長い地形で、古くからの米どころとして知られている。銭形平次捕物控の作者野村胡堂の出身地であり、集落の小高い丘の上には「野村胡堂・あらえびす記念館」があり、全国からの来館者を迎えている。

今から90年ほど前、東北地方は経済恐慌と昭和9年（1934）の大冷害によって、経済的に困窮し、疲弊する一方だった。この時、東京の三井報恩会（三井財閥が設立した社会事業財団）では、東北地方の中でも冷害による被害が甚大であった青森県と岩手県から1か村ずつ「特定振興村」（経済更生のモデル農村）を指定することとし、昭和10年（1935）青森県東津軽郡西平内村（現在の平内町）と岩手県紫波郡彦部村（現在の紫波町彦部地区）を選定。この三井報恩会の当時の理事長が米山梅吉氏であった。

彦部村では三井報恩会からの多額の資金援助のもと、乳牛や緬羊の飼育などの酪農振興や農家の生活改善の指導など多岐にわたる事業を展開し、地域社会が蘇った歴史がある。

太平洋戦争や戦後の財閥解体などの影響で長らく三井報恩会の助成事業のことは忘れられていたが、事業から80年後、彦部地域での歴史調査がきっかけで、当時の資料や写真が見つかり、三井報恩会が彦部村で行った事業の全貌が明らかになった。その後、平成23年（2011）東京の三井報恩会、静岡県の米山梅吉記念館、青森県の平内町との交流が80年の時を経て再び蘇り、現在に至っている。

さて、令和7年（2025）は彦部地区が三井報恩会の特定振興村に指定されて90年の節目の年だった。同じく指定を受けた青森県の平内町では、90周年事業として当時の事業記念碑の内容を解説した案内板を設置した。彦部地区では指定90周年を記念して当時の事業を劇にして上演することを思い立った。

実は彦部公民館では地域づくりの一環として、「あらえびす一座」という劇団を結成し、毎年2月に行われている「彦部公民館まつり」の中で、地域の歴史に題材をとった脚本で演じている。「あらえびす」の名前は、野村胡堂の音楽評論家としてのペンネームに由来しており、地域の歴史を誰にでも分かりやすく伝えることを目的としている。昨年10回目の公演を行ったが、私はこの劇団で脚本を担当している。

今回の脚本は「新しき村　三井報恩会農村振興事業物語」と題し、昭和初期に彦部村で行われた三井報恩会の助成事業について、歴史的事実をもとにして構成した。劇の内容として特徴的なのは彦部村の事業内容だけでなく、三井報恩会と米山梅吉理事長、さらには同じく指定を受けた西平内村についても描いたことにある。

米山理事長は全国の助成先に金銭的な支援を

行っただけでなく、その内容を細かく分析し、適切な指導を心がけた。さらにハンセン病施設など全国の助成先に自ら足を運び、状況をつぶさに確認している。米山氏は全国の施設を訪問する際にポケットマネーでお土産を持参されたとのことで、彦部村を訪問した際にも、村の小学校の児童全員にビスケットを贈ったという温かいエピソードが残されている。このような内容を劇の脚本に反映させ、米山理事長を準主人公の立場で登場させていただいた。

また、西平内村に関しては当時の豊島友太郎村長が劇中に現れ、村人の集会施設である「村民の家」の建設や、漁業、農業振興によって地域が蘇ったさまを語る設定とした。これにより、東京の三井報恩会、岩手県の彦部村、青森県の西平内村の三か所の様子が分かる内容とした。

練習風景

「あらえびす一座」の練習は11月から始まった。劇を演じるのは地元の農家、学校の先生、保育士など彦部地区にゆかりのある方々で、年齢も20代から80代まで多彩なメンバー。ほとんどの方が舞台に立ったことのない素人だが、演劇経験のある監督の指導のもと練習を重ねた。

あらえびす一座の熱演

令和8年2月15日の劇本番には、大勢の地域住民のほかに東京の三井報恩会、静岡の米山梅吉記念館の幹部の方々、同じく指定を受けた青森県平内町の方々など関係する方も遠路お越しくださった。

彦部公民館の集会室は250人を超える観客で埋まり、1時間近くに及んだ劇を観劇いただいた。素人劇団ではあるが、当時の村人や米山梅吉氏の熱い思いを演じることができたと思う。足をお運びいただいた皆様には本当に感謝している。

私は以前の調査で当時の事業を知るお年寄りから聞き取りを行った際、どの方々も報恩会に対して感謝の気持ちを述べられていた。三井報恩会と彦部の村人が一体となって進めた事業だったので、村の人々の心に残ったと感じる。その思いが今回の劇につながった。

今年は米山梅吉氏の没後80年であると聞いた。長い年月を経て米山氏の功績を知る方は少なくなっていると思われるが、今回観劇された方が、90年前に行われた三井報恩会事業を改めて思い起こし、未来へと伝えてほしいと願っている。

終演後、あらえびす一座と関係者が一同に会して

米山の雅号

米山梅吉が漢詩や俳句・短歌を嗜んでいたことは知られているが、創作にあたっていくつかの雅号を使っていた。

中学生のころ投稿した頴才新誌には「題小杜停車図」明治14年10月東海道沼津中学和田梅聲として文章が掲載された。これは、杜牧の詩と月山の絵の解説である。少年時代に通っていた映雪舎の初代校長久我頑量は、漢籍に詳しい人であった。友人稲村真里によると、梅吉少年は頑量氏について漢学を学んだという。そして中学時代に四書の輪講で基礎知識を学び、普通の文章を書きそれを漢文に直す復文で漢学に磨きをかけた。沼津中学で出会った稲村氏は、自分より先に入学していたひとつ年上の秀才の同級生で「年を重ねても兄弟のように仲良くしたい」と認めた稲村氏宛ての手紙も「梅聲より」と締めくくっている。

◁沼津新聞
（沼津市明治史料館蔵）

米山梅吉の投稿部分▷
（沼津市明治史料館蔵）

明治16年2月、沼津新聞に「帝政黨の瓦解を促す」と題して寄せられた原稿には、自分のような少年がこのようなことをいうのもなんだが、と前置きして「政黨とは政治上の主義目的を同じにしてこれを実行する者の結合体である。しかしその主義ではなく腕力にものをいわした行動やお金のことで仲間割れした政黨の動きをみて瓦解せよ」といった少し過激な自論を寄せている。この時には、和田梅聲という署名が使われている。少年の率直で真っ正直な意見を述べるには、梅吉の生の声という**梅聲**を用いたようである。

50代では尋九という雅号がみられる。若い頃、句会に臨んだ米山はまだ俳号が決まっていなかった。俳友に相談したところ、同席していた法学博士の和田垣謙三氏が「米山ならば甚句だろう」と言った。米山甚句は、越後の米山薬師から始まった俗謡といわれているが、同地方出身の江戸時代の力士・米山が甚句を得意としていたから、という説もある。梅吉も相撲が好きだった。句会に参加した折、春場所というお題で「春場所や人は桃色さくら色」といった句も詠んでいたので、尋九と洒落こんでみたのかもしれない。

尋九

50代の米山は、**八十八峰**という雅号も使っている。これは米という字を八十八に、山を峰と読み替えて使っていた。勝海舟の座右の銘や裾野・定輪寺中村理一師にあてた書に署名している。このころの米山は長男、次男を相次いで亡くし、悲嘆に暮れていた時期でもある。その後、昭和15年に青森県西平内村のために揮毫した「山晴春色繋」にも八十八峰を使

用している。

昭和9年に書かれた「清風入竹径　明月照琴心」の漢詩は、**藍壺**と署名している。藍壺という雅号は、60代になってからの使用が確認されている。これは長泉町にあり、現在ジオパークにもなっている鮎壺の滝からとったものである。富士溶岩流の岸壁に形成された滝は、現在ジオサイトに登録されている。幼い頃遊んだであろう鮎壺の滝に思いを馳せ、鮎を水の藍色に替えて藍壺とした。自らまとめた句帖にも藍壺俳句と題している。八十八峰と藍壺で、山水を表しているとも考えられる。

八十八峰　　藍壺

米山梅吉記念館の敷地に「いさかひもなく漫々の春田かな」という俳句の句碑がある。長泉の墓碑にもこの句碑があてられているが、この句は**子幸**という雅号で詠まれている。梅吉の直筆を石工に刻ませたもので、元々下土狩の別邸にあったものが、記念館建設にあたり現在の位置に移された。

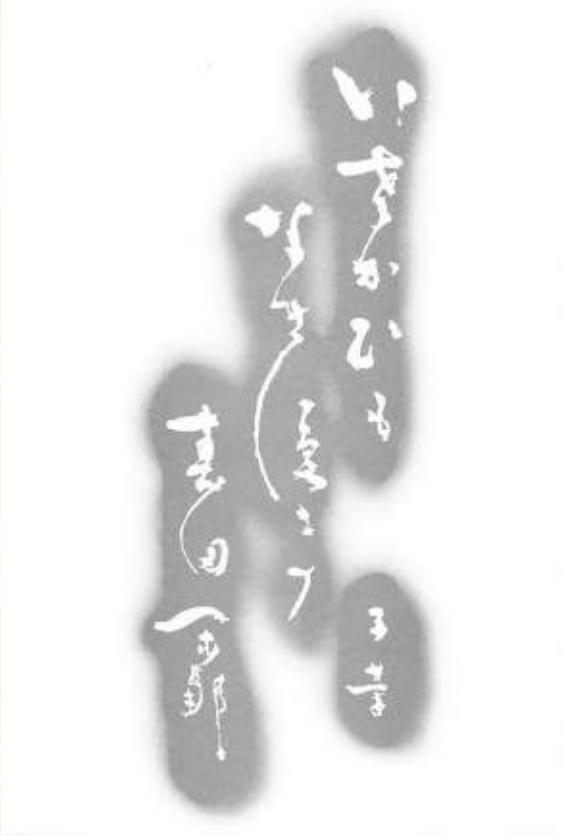
富士山と箱根山に挟まれ、南に向かって扇状の地形をなし三島と沼津にむかって扇は大きく開く。梅吉が少年時代を過ごした長泉・上土狩は、この五分開きのところにあたる。富士・愛鷹山に沿って流れる川は黄瀬川と呼ばれる。富士山には川がなく、降る雨や雪は地下に浸透し三島や清水町に湧水となって現れる。この黄瀬川を農業用水として水田を耕し生計をたてる村は二十九、八百町歩といわれた。江戸時代、この村々を支配したのは小田原藩と沼津藩で、寛文以前は水が乏しく日損で稲の植え付けができなかったり、せっかく稲を植え付けても枯れる年が多く、農村は苦しんだ。この辺りの水田は、日損場（ひそんば）と呼ばれていた。それを見た江戸の土木業者友野与右衛門は、箱根・芦ノ湖の水を駿河の二十九村に供給することを計画し工事を始めた。こうして、寛文10（1670）年に箱根用水が完成した。箱根用水は農民に大きな期待と希望を与えた。

完成後は、箱根用水の水をいったん黄瀬川に落として水を合流させて、水かさを増やして分水する方式をとった。これは水が豊富になった一方で、水論が始まる原因にもなった。そこで、箱根用水の水と黄瀬川の水を利用する二十九村で、水利権を平等かつ効率的に利用し管理する箱根用水組合が作られ、地域的に上郷・中郷・下郷とわけた。黄瀬川用水だけの時は水年貢がなかったが、芦ノ湖の水には年貢がかかり、しかも黄瀬川で合流するため水の区別がつかない。水利のよい上郷と悪い下郷が、同じ年貢を払うことに矛盾を感じた人たちに、また争いが起き始めた。しかし、用水組合の水管理により村と村の争いは次第に減少した。すると水ぐちの隣同志の水喧嘩がおきた。水論からいさかい、水喧嘩と時代の水に対する管理の方法によって言い方も変わった。最後の水論は、明治27年から30年まで法廷で争われた箱根用水組合と神奈川県千石村との裁判、芦ノ湖逆さ川事件である。その結果は用水組合の言い分が通り、水利権が認められた。この時の水利組合・長泉村代表が当時村長であった米山の養父・藤三郎だった。梅吉は若かりし頃、養父の姿を見て農民の難儀を心にとめていたのかもしれない。

孔子の弟子に子貢という人物がいた。孔子の門人には頭に子の字がついた人が多く、子貢もその一人だった。子貢は衛の国の裕福な商人の家に生まれ、孔子より31歳年下であった。弁舌に優れ、衛、魯でその外交談判にあたり成功したという。『史記』によ

れば、子貢は魯を救うために越・呉・斉・晋に仕え、縦横家顔負けの弁舌をふるって魯を救い、呉を滅ぼし、越を覇者たらしめ、斉を弱めて晋を守ったとされる。このような功績から、魯衛の宰相になったという伝誦がある。さらに「貨殖列伝」にその名を連ねるほど商才に恵まれ、孔子門下で最も富を得た。子貢の商才を讃えて、後世、財界に大成のあった者に贈る誉め言葉として、子貢の姓である端木（たんぼく）にちなんだ「端木遺風」が使われていたという。子貢は財神（金運を高め、財運を呼び込む強力な力を持つ神様）として尊崇されている。孔子の死後、弟子たちの実質的な取りまとめ役を担ったので、孔子の名が広まったのは子貢が弟子にいたからだ、ともいわれている。

子幸は自身の子供たちの幸せを願ったものか。あるいは少年時代から親しんでいた漢籍により学んだ、子貢への憧れを意識したものであるのか。今となってはその思いを推測することしかできない。



子幸

米山梅吉翁雅号の変遷

雅号	年令	年代	代表作
梅磬	15	明治十五年	稲葉氏への手紙末尾
八十八峰	51	大正七年	テキサスの野にひんがしや初日の出
		〃九年	
		〃十一年	渡米歌日誌「八十七日」出版
	59	〃十二年	勝海舟座右銘
		〃十五年	定輪寺中村理一師写書 署名
			起きつ伏しつまろびつ磐根扣みつつ 署名
			競える山はまながいの外に 署名
	74	昭和十五年	山晴春色繁 署名
		〃十六年	大清君の写書 署名
尋九	54	大正十年	宮人の轍のあとや雪晴るる 署名
			古戦場新戦場春一様に
藍壺	60	昭和二年	「銀行行余録」出版
		〃五年	長男東一郎七回忌箱書 署名
			歌集「東また東」出版
	67	〃九年	明月照琴心
		〃十一年	「常識関門」「ロータリーの理想と友愛」出版 署名
		〃十三年	「看雲録」出版
子幸	61	昭和三年	いさかいもなき満々の春田かな 署名
			松風やはぎの葉そよぐほどにこそ 署名
			百年に一たびのさかえ花さきて
			枯るとふこれの蘭の奇しも
梅吉	76	昭和十七年	ロータリーは決して劃一のものとして統一せずアジアの流儀を以てこれを運営すべきものである

米山梅吉記念館が内閣府認定の公益財団法人となりました

米山梅吉記念館は、1969年3月に静岡県教育委員会が管轄する財団法人として認定されました。その後の時代の変化に伴い、令和7年度の事業計画で、記念館がより活用され世界に拡がる役割を担うべく「日本のロータリーの情報センターになる」という基本理念を掲げることとなりました。これに基づき、静岡県から活動領域の拡大を図る上で、東京事務所を開設し内閣府の管轄移管に向けた手続きをおこなっておりましたが、令和8年1月6日付で内閣府より認定を頂き、内閣府所管の公益財団法人となりました。

寄贈資料のご紹介

東京都新宿区の飯島順氏より、白柳秀湖著『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』千倉書房（1931）が寄贈されました。

白柳秀湖は（1884～1950）評論家・小説家。静岡県引佐郡気賀町生まれ。本名、武司。早稲田大学在学中から堺利彦の社会主義思想に影響を受けて平民社に参加。大逆事件以後、社会主義思想と縁を切り、社会評論家、歴史家として活動。

『日本富豪発生学』は下士階級革命の巻、閥族財権争奪の巻からなります。「日本の明治維新も、ヤハリ西洋各国に於けるブルジョア改革の一形態であつたといふ、著者の考察」（『同著・序より』）をまとめたものです。

飯島様は、ご自身の祖先に関わる記述を探してこの本を古書店から購入した際、巻頭の「米山梅吉先生」の文字を見つけたそうです。「之清鑒」と読めます。「自信作なので読んでください」と著者から米山に贈呈された本ではないでしょうか。

お手持ちの資料で米山梅吉に関連するものがあれば、ぜひ米山梅吉記念館までご一報ください。

お知らせ

米山梅吉記念館
春季例祭

［日時］2026年4月18日（土）14時　例祭 講演
［場所］米山梅吉記念館ホール

講　演

［演題］地方発の経済外交
［講師］元外務大臣・衆議院議員
静岡北 RC
上川陽子 氏

懇親会　ロビーにて講師を囲んでの懇親会。
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

YouTube　**米山梅吉記念館のチャンネル開設しました**
ご視聴・ご登録、よろしくお願いいたします

米山梅吉記念館のご案内
新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分
［開館時間］午前10時～午後4時
［休館日］●月曜日　●12月28日～1月4日
●整理のための休館日（5月・8月の特定日）

米山梅吉記念館　館報　Vol.47 春号
■発行日／令和8年3月20日　■発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 松村 友吉
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL（055）986-2946　FAX（055）989-5101　E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

米山梅吉記念館
公式ホームページ
https://yoneyama-umekichi.jp